

## 1 部門目標

- ・検査技術と精度の向上
- ・スタッフ連携、モダリティ連携の強化

## 2 業務体制・スタッフ

通常日勤業務、日当直業務（1名）、準夜・深夜勤業務（1名）と3種類の業務体制になっています。

一般撮影室2室・CT室1室・X線テレビ室2室・乳房撮影室・MRI検査室1室・核医学検査室・ポータブル撮影装置3台・手術室イメージ2台、リニアック1台、治療用CTシミュレータ1台を、常勤の放射線技師14名、非常勤放射線技師2名、受付業務4名（非常勤）、総勢20名のスタッフで対応しています。

医療機器については、今年度MRI装置1.5T装置が3Tの高磁場装置に更新され、細部を高速に撮像できるようになりました。平成30年度にはX線テレビ装置の更新が予定されています。X線テレビでは広い視野と汎用性の高さを活かした柔軟な検査への対応が見込まれ、高感度かつ高分解能の装置により、安全確実な検査・処置が実践できることが期待されます。今後も安全安心な医療を提供するための体制を整えるために計画的に機器の更新を予定しています。

## 3 業務実績

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	率(28→29)
CT	8,719	7,809	7,946	1.8%
MRI	2,570	2,228	1,988	-10.8%
核医学検査	413	395	353	-10.6%
血管造影	532	398	356	-10.6%
乳房撮影	1,723	1,854	1,501	-19.0%
一般撮影 他	32,473	27,368	28,535	4.3%
合計	46,430	40,052	40,679	1.6%

※H29年より乳房撮影の集計算出方法が件数から人数に変わりました。

## 4 1年間の総括

H29年度の検査状況は、総検査人数としては40,679人と前年度と比べ627人増(1.6%)と若干の増加が見られました。

各モダリティ別の検査数として、CT：7,946人、MRI：1,988人、乳房撮影：1,501人、一般撮影他：28,535人は、H28年度と比較し、それぞれ137人増、240人減、353人減、1,167人増でした。MRIの減少は機器更新のために約2ヶ月間の停止期間があったためと考えられます。乳房撮影は、昨年度の機器の更新に伴い集計方法の変更が影響しています。減少傾向が見られる理由として、これらのモダリティを有効に活用する診療科の縮小に起因していると思われます。核医学検査および血管造影は、それぞれ395人→353人、398

人→356人と減少がみられますが、核医学検査は全国的に減少傾向が強く、特に循環器関連の核医学検査の減少が多く見られます。血管造影の減少は、昨年と同様に冠動脈 CT への対応を行っていることによる診断カテーテルの減少と、カテーテル治療のバックアップ体制の変化が影響していると思われます。

大きな事業として、MRI 装置の更新がありました。MRI 装置は 1.5T 装置から 3T 高磁場装置になりましたが、近年の撮像アプリケーションの熟成により、病変検出感度が向上しながらも細部にわたって詳細な画像を取得することが可能となりました。

## 5 今後の目標

現在の画像は、質的診断を目的とする情報源としての価値が強く求められています。要求される検査内容にも変化が見られ、特に CT・MRI・核医学などの後処理を伴う検査について顕著に現れています。造影 CT の比率増加とそれに伴う三次元画像構築、MR 検査では特殊撮影法の追加、CT や MRI 画像と核医学画像の融合表示処理など、形態と機能の同時評価が求められ、2つのモダリティが一つの寝台で構成されている SPECT/CT や PET/CT、PET/MR など機器の更新時には考慮する必要もあります。三次元画像構築ソフトウェアの解析能力も年々強化され、時間外の縮小という形で成果が表れてきています。MRI については、昨年来の課題であった診療局の特殊撮影への要望に対しても対応可能となりつつありますが、機器の潜在能力は十分に引き出されてはいません。検査効率の改善による待ち時間の短縮など、患者満足度アップに加え、診療に求められる画像を提供するために機器の潜在能力を生かし切る努力を今後も継続する必要があると考えております。各スタッフのモダリティへの習熟に力を入れた人員配置を考え、特定スタッフへの負担を軽減しつつ、経験の浅いスタッフを順次レベルアップさせる必要性を感じています。

放射線科全体の検査が減少してはいますが、逆に各モダリティの学修をする機会は増えています。勉強会、研究会等への参加だけでなく、自ら研究を行うことで知識を深め、自施設が持つ機器の能力を使い切るための努力を惜しまずに勤めたいと思います。